

26. 9. 15
抄 報 日

昔の人はよく歩いた。
羽州鶴岡に清野きよのという商家の内儀おかみがいて1817
(文化14)年に日光、江戸、伊勢、京都、新潟とめぐる108日間の旅を

している。距離にして2400キ余り。40キ近く歩く日もざらだったという▼清野の旅日記を読み解いた金森敦子かなもりあつこさんの「きよのさんと歩く大江戸道中記」(ちくま文庫)に教わった。2人の子を持つ31歳の主婦だった清野が「等身大の感性で、興味があることは何でも書き付けた」日記は、歩く旅ならではの発見や感慨に満ち、読者の感興をそそる▼小まめに女郎たちの姿を書き留めているのが興味深い。鬘まげの形や着こなしを子細にチェックしては「目を驚かす」「いと古風」などと寸評していて装いに強い関心を寄せていたことがうかがえる▼そんな清野を驚嘆させたのが旅の終盤に訪れた新潟町の女たちだ。よほどあか抜けていたのか「この所の女郎は道中の女郎一番」と絶賛している。魅せられない男がいるわけもなく新潟花街かがいの名はやがて天下に知られ、戦後は洗練された芸者町として多くの文士に愛された▼「花街の景観まちづくり最前線」と題したシンポジウムが28日、新潟市中央区の三業会館で開かれる。全国指折りの伝統と町並みを守り、中心街の活性化につなげようとの取り組みの一環だ▼伎芸ぎげいや建築物の継承において「見通しは決して明るくはない」と関係者はいう。貴重な町の財産をどう守り、次代に伝えるか。シンポを聞きがてら、清野にならって花街を歩き考えたい。